日本と中国の地理書の比較思想史的研究

～中国大陸における山岳実地調査を中心に～

Ideological Studies on the Geographical Descriptions in Jananese and Chainese.

プロジェクト代表者：薄井　俊二（教育学部・教授）
USUI　Shunji（Faculty of Education,Professor）

１　はじめに

本研究プロジェクト（代表：薄井俊二、飯泉健司・大橋修一・小林聡・田村均）の究極の目的は、中世期に日中両国で盛んに行われた地理書編纂の諸相を比較検討し、日本と中国における地理的な世界把握の様相と、その交流の有様を明らかにすることにある。

上記の研究の一環として、この数年間は、中国側の課題として、中世期に登場した新しいタイプの地理書である「天台山記」「廬山紀略」「清涼山伝」等の山岳地誌について、それらの内容的な特徴を明らかにすることに取り組んできた。この研究においては、山岳地誌のテキストの検討が基礎になるが、それをより深めるためには、それらの記述対象である山岳を直接訪れて、そこがどのような環境にあるのかを実地に調査する必要がある。また中国の地図資料等は、外国からの入手が困難なことから、それらの収集のためにも、現地におもむく必要があった。

そこで、平成 17 年度には科学研究費交付金や埼玉大学学長裁量経費の交付を受けて、浙江省天台山と江西省廬山を訪問調査した。そして本研究プロジェクトの実施にあたった平成 18 年度には、山西省五台山を訪問調査した。

本報告では、平成 17 年度分も含めた、これらの３回の訪問調査の概要を記すこととする。

２　平成 17 年度調査～その１・天台山～

（１）天台山と「天台山記」の概要

天台山は、「中国浙江省東部にあって数百から千メートルぐらいの峰々が連なる天台山脈の主峰。最高峰は華頂山ともいい，標高 1138 メートル．晋の孫綽の「遊天台山賦」に謳われるなど，古くから佳景幽寂の地として知られ，道士・隠士が多く住し，さらに仏寺も多く建てられたが，575 年(陳の太建７)智顗がここに入山して以来，中国天台宗の根本道場となった」（『岩波仏教辞典』より）

「天台山記」は、唐の道教の道士である徐霊府の撰。中国本土では南宋ころから逸書扱いを受けてきたが、平安時代に日本に伝来したものの写本が伝存しており、明治のはじめに「古逸叢書」に収録されて影印出版された。原本の写本は、日本の国立国会図書館の所蔵本が唯一のものである。

しかしこの写本は唯一の伝本であることもあって、魯魚の誤りも多く、きちんと解読されてはいないのが現状である。その意味でも、「天台山記」の解読には、現地の地理状況の把握が欠かせないものとなっている。

（２）訪問調査の概要

〇旅程：2005/12/23～26（薄井による単独行）

１．午前（成田→杭州→天台山）、午後：天台山国清寺およびその周辺の調査

２．終日：天台山内調査：高明寺・智者塔院・方広寺・華頂寺

３．午前：天台山内調査：赤城山、午後（天台山→杭州）杭州市内歴史博物館

４．午前：杭州市内、午後（杭州→成田）

〇目的とその成果

天台山については、最澄・円珍等が滞在した国清寺の立地環境、およびその奥の院にあたる禅林寺（今の真覚寺付近）周辺の立地環境、また国清寺から高明寺へ到る経路の環境を調べることが目的であった。またさらにその奥にあたる、石梁飛瀑や華頂寺の立地環境も確かめる必要があった。

これらの地域へは、今回は自動車を利用しての訪問となったが、高明寺より奥の地域については、下界から隔絶した静謐な環境にあり、宗教的な修行の場としてふさわしいものであることが確認できた。また「天台山記」記載の記事との照合も行うことが出来た。

しかし、山中の三井や桃源洞、国清寺付近の赤城山については、「天台山記」に記載があるものの、今回の調査では時間の関係上訪問することができなかった。今後の課題である。

〇入手した主な資料

「台州交通旅游図」（浙江省測絵大隊）

『高明寺志』（当代中国出版社）、『天台山詩聯選注』『天台山游記選注』（西安地図出版社）他

３　平成 17 年度調査～その２・廬山～

（１）廬山と「廬山紀略」の概要

廬山は別名、匡山または匡廬といい、江西省九江市にある。 北は長江に面しており、長さ約 25 キロ、幅約 20 キロで、山の峰の大部分は海抜 1000 メートル以上で、主峰の漢陽峰は海抜 1474 メートルのところにある。山々は、雲に覆われており、幽玄である。また、泉や滝、不思議な形をした石などが分布しており、見所が多い。 夏はさわやかで心地よいので、国内有数の避暑地、療養地として知られている。

歴代の詩人、墨客もこの山を訪れており、1500 人にものぼる詩人が登山したと伝えられている。中でも有名なのは、陶淵明、李白、白居易、蘇軾、郭沫若などで、この地に多くの傑作を残している。

近代になって、西洋人によって山の上が避暑地として開発され、さらには日中戦争時代以後、張学良、蒋介石、毛沢東、周恩来などの有名政治家が居住した別荘が残されていることから、観光地として発展してきている。

「廬山紀略」は、東晋の僧侶慧遠の作と伝える山岳地志である。宋陳舜兪「廬山記」等に引用されて残っているが、全文が伝わっているわけではない。しかし、六朝期以前の山岳地志のほとんどが、断片か名称を留めるにとどまっていることに比べると、かなりな部分が残されており、貴重である。

（２）訪問調査の概要

〇旅程：2006/3/6～3/10（薄井俊二と飯泉健司）

１．午前（成田→上海）、午後（上海→南昌）

２．午前、南昌市内浙江省立図書館。午後、廬山北麓の東林寺・西林寺
３．午前、廬山錦綉谷。午後、石門澗・廬山北麓
４．午前、石鐘山。午後（南昌→上海）
５．午前、上海市博物館。午後（上海→成田）

○目的と成果

現在廬山への入山は、南の南昌から北上して入るルートが主だが、かつては北の九江からの南下ルートが主流であったと思われる。そこで今回の調査でも、北側からの入山ルートを想定した調査を試みた。その結果、廬山北麓にある東林寺は、九江から廬山に入る途上にあって、いわば廬山の表玄関の役割を果たしうる位置にあることを確認できた。また現在は奇岩や瀑布が重なる名勝として知られる石門澗は、東林寺から廬山山頂へ至る登山ルートの一つであったことも確認できた。

ただし今回は自動車を利用した調査にとどまったため、改めて徒歩での「東林寺→石門澗→廬山山頂」というルートを確認する必要がある。今後の課題である。

また今回は、浙江省立図書館も訪問し、現在の中国における図書館の現状についても見聞した。

○入手した主な資料

「廬山旅游地図」（江西美術出版社）、「南昌市旅游交通図」（江西美術出版社）
『中国国家地質公園　廬山』（中国地図出版社）『廬山典籍史』（江西高校出版社）『廬山地理調査』（武漢大学出版社）他

４　平成 18 年度調査～五台山～

（１）五台山と「清涼山伝」の概略

五台山（ごだいさん）は、中国山西省東北部の五台県にある古来からの霊山である。標高 3,058m。一名、清涼山、仏教では、文殊菩薩の聖地として、古くから信仰を集めている。旧字表記では、五臺山。

山名の由来は、この山が五つの主要な峰（東台望海峰、西台挂月峰、南台錦綉峰、北台叶斗峰、中台翠岩峰）によって構成されていることによる。

山内には、北魏の時期に大浮図寺と呼ばれる寺が建立され、それ以後、多数の山岳寺院が建立された。その最も繁栄した時期には、300 以上の寺が林立していたという。観音菩薩の霊場である普陀山、普賢菩薩の霊場である峨眉山と並んで、中国仏教の聖地とされる。現在でも、台内に 39 ヵ寺、台外に 8 ヵ寺で、合計 47 ヵ寺の寺院が存在する。

日本の平安時代から鎌倉時代の入唐僧や入宋僧の多くも、天台山と共に率先してこの山を訪れた。また、チベット仏教徒の尊崇も集めており、中国内地では、漢伝仏教とチベット仏教との唯一の共通の聖地となっている。

五台山は別名清涼山ともいうが、当該山を対象とした地理書にも「清涼」を冠したものが多い。中でも現存する古いものとしては、唐慧祥「古清涼伝」、宋延一「広清涼伝」、宋張商英「続清涼伝」の三つがある。このうち「続清涼伝」は、五台山に関する霊験を集めた伝奇集の趣をなしており、地理書としての性格を失っているが、「古清涼伝」は唐代までの五台山を、「広清涼伝」は唐宋時代の五台山を記述した、山岳地理書といいうる内容である。とりわけ「古清涼伝」は、その全文を伝存する山岳地理書としては、最古のものであり、貴重である。

（２）訪問調査の概要

〇旅程：2006/8/25～30（薄井による単独行）

１．午前（成田→北京）、午後（北京→太原）

２．終日：太原市内及びその周辺調査

３．午前：太原→雁門関・代県→五台山：仏光寺（台外）・清涼寺・金閣寺

４．終日：五台山：中台演教寺・獅子窩・台懐鎮寺廟

５．午前：五台山：竹林寺・南禅寺（台外）、午後（五台山→太原）

６．午前（太原→北京）、午後（北京→成田）

〇目的と成果

・五台山については、「清涼」とも呼ばれるその静謐な環境を知ること、山内に散点する寺院群の立地による性格の違いなどを調べることを目的とした。残念ながら時間の関係上、五峯については「中台」の演教寺を訪問できただけであったが、その立地状況から他の四峯についても同様の性格であろうことを推測した。

つまり、五峯上の諸寺院は、天台山における禅林寺や廬山における山頂の諸寺院のように「奥の院」的な性格を持っていること、五峯に囲まれた盆地に位置する「台懐鎮」の寺院群は、天台山国清寺や廬山東林寺と同様、山麓にあって、外に開かれた入り口の役割を果たす位置にあることを確認できた。

〇入手した主な資料：

「五台山導游図」（中国地図出版社）、「五台山交通旅游図」（五台県旅游局）

『五台山寺廟』『南禅寺・仏光寺』（山西人民出版社）、『五台朝頂』（山西古籍出版社）他

５　今後の課題

今回の実地調査は、取りあえず現地に身を置いてみるという、予備調査的な意味合いが強い。これらの地域に対しては、これまでの調査を踏まえ、更には現地の研究者とも連携を取りながら、改めてより詳細な現地調査を行う予定である。

また、唐代までのまとまった山岳地志で現存するものには、上記の他に、湖南省衡山を対象とする「南岳小録」、河南省王屋山を対象とする「王屋山記」、四川省青城山を対象とする「青城山記」などがある。これらの山岳も訪問調査の対象として今後取り上げる必要があろう。

以上